

草のみどり

Kusa no Midori



特集

公認会計士試験合格祝賀会

FRONT LINE

商学部 | 実社会で生きる多様な学び

国際情報学部 | 学部長交代の今、見つめ直すITLの未来



FACULTY OF GLOBAL MANAGEMENT

世界を人に動かす Vol. 36 なるう

企業経営とグローバル経済の先端知識、優れたコミュニケーション能力を養うべく、国際経営学部生は前進を続けています。



国際経営学部国際経営学科4年
 私立順天高等学校(東京都)出身

筒井 優太

行動する知性が育てた私 行動の挑戦、知の挑戦を重ねた国際経営学部の4年間

だからこそ、2022年に中央大学国際経営学部へ入学したとき、「大学では何かに本気で挑戦したい」という思いを強く抱いていました。

◆G-ACEで始まった行動の挑戦◆

私は幼少期をスイス・ジュネーブで過ごし、中学3年生のときにはニュージーランドへ留学しました。国際的な環境に関わる活動がしたいと考えていたとき、履修相談会で先輩から誘われたのがG-ACEでした。留学サポートや異文化交流を行う学生団体だと知り、「ここでなら本気の挑戦ができる」と感じました。

高校3年間は、新型コロナウイルス感染症の影響で、文化祭や体育祭、海外研修などが中止となり、満足のいく学校生活とは言えませんでした。担任の先生が企画してくださったクラス独自の修学旅行も直前で中止となり、高校生活を振り返ると、我慢の3年間だったという思いが強く残っています。

我慢の高校生から芽生えた「挑戦したい」という思い

入った当初はイベント運営やマネジメントの経験もなく、戸惑うことばかりでしたが、



世界各国の学生が集う国際交流イベント



G-ACEの先輩たちの卒業式



国松ゼミでのイベントの一コマ

少数数の団体だったこともあり、1年生の私にも多くの機会が与えられました。「経験したい」「任せたい」という思いで、いただいた仕事には全力で取り組みました。そうして迎えた2年目には副代表を務めることになり、多国籍の学生約100名を迎える大規模イベントの運営を担当しました。

人前で話すことが得意ではなかった私にとって、大勢の前で英語で進行することは大きな挑戦でした。準備期間

◆ゼミで向き合った知の挑戦◆

も限られる中、当日は緊張で足が震えました。必死に言葉をつなぎ、イベントをやり遂げることができました。終了後、海外学生から「この大学で学びたいと思った」と声をかけてもらい、自分の挑戦が誰かの未来を前向きに動かしたと実感しました。

大学2年後期のゼミ選びは、私に



GLOMAC AWARD2023



白門祭にて、中大マスコットキャラと

とって大学生活の方向性を定める重要な節目でした。G I A C E の先輩から紹介された国松麻季先生のゼミでは、学生同士が高度な議論を交わしており、その学びの姿勢に強くひかれました。

ゼミでは、優秀な同期に囲まれ、最初は議論についていけず悔しい思いもしましたが、文献を読み込み準備を重ねる中で、自分の言葉で考えを伝えられるようになりました。G I A C E で培った行動力やコミュニケーション力が、ここでも支えになっていました。

そんな中、国松先生が企画してくださった特別講義で、第一線で活躍する外部専門家のお話を伺ったことが、私の学びの姿勢に大きな転機をもたらしました。キャリアや経験に裏打ちされた言葉は、私が想像していたビジネスの世界をはるかに超えるスケールと視野の広さに満ちており、強い衝撃を受けました。この講義でいただいたアドバイスは、卒業論文の方向性を明確にするヒントとなりました。試行錯誤を

重ねながら議論と分析を深める中で、研究の輪郭が次第に見え始め、最終的には大学4年間の学びの集大成と言え、研究を完成させることができました。

挑戦を胸に、国際物流の世界へ

4年間の挑戦を振り返る中で、私は改めて「挑戦することが自分を成長させてきた」と強く実感しています。G I A C E での実践的な挑戦、ゼミでの知的な挑戦。それらはすべて、次のステージへ進むための土台になりました。そして私は2026年4月から国際物流企業に入社し、社会人としての新たな挑戦を迎えます。

国際物流の世界にひかれた理由は、幼少期のジュネーブでの経験にさかのぼります。遠く離れた地で日本の食材や家電に出会うたびに、「世界は誰かの仕事によってつながっている」と感じていました。その裏側で働く人々への憧れは、ずっと心の中に残っていました。また、海外で働き、英語と笑

経営と経済をつなぐ視点が未来を拓く

ぜん だおず
曾 道智 国際経営学部教授

国際経営学部では、企業が国境を越えて活動する現代の経済環境を正しく理解し、その変化に対応できる力の育成を重視しています。近年、世界では関税をめぐる競争が激しさを増し、企業は生産拠点の移転やサプライチェーンの再構築を迫られる場面が増えています。こうした環境のもとで企業が最適な意思決定を行うためには、経営学の知識だけでなく、経済学的な視点が欠かせません。

たとえば、関税は単に「輸入品にかかる税金」というだけでなく、国際交渉や国内産業保護など複数の目的を持つ政策です。学生がその仕組みや影響を理解できれば、企業がどの国に工場を置くべきか、原材料をどこから調達するか、といった実務的な戦略を経済合理性に基づいて考えることができるようになります。実際の授

業でも、国際貿易や企業立地の理論を扱いながら、現実の企業事例と結びつけて議論を行っています。

加えて近年は、国際協調よりも自国の短期的な利益を優先するリーダーが世界各地で台頭し、国際経済環境は一段と不確実になっています。このような時代だからこそ、学生には、目の前の利益に流されず、長期的な視点で物事を判断する姿勢が求められます。経営学や経済学の基本をしっかりと学ぶことは、国際社会の中でみずからの役割を見定め、持続的に価値を創造できる人材への第一歩です。

国際経営を学ぶうえで、経済学は「背景知識」ではなく、複雑な世界で最善の選択を導くための道具です。学生たちには、理論を使って現実を読み解き、みずからの判断で未来を切り開く力を身につけてほしいと考えています。今後も学部として、国際社会で活躍できる人材育成に一層取り組んでまいります。

国際経営学部だより

顔で人をつないでいた父の姿は、私の挑戦したい理由を、さらに強くしてくれました。父が見た景色を自分の目でも見てみたい。多様な文化の中で信頼を築き、世界を動かす仕事がしたい。そう思い、海外駐在をめざせる環境を軸に就職活動を進めました。

大学で培った挑戦力と行動力。この

2つこそが、これからの人生で私を支えてくれる武器になると思っています。環境が変わっても、新しい挑戦に飛び込み、自分の殻を破り続ける姿勢だけは失わずにいたいのです。日本と世界を物流でつなぐ仕事をもち、挑戦の連続となるこれからの人生を、自分らしく切り拓いていきたいと思っています。